

[科目区分]：教育実践高度化専攻（教職大学院）専攻共通基礎科目（各コース共通）

[授業科目名]：愛媛の教育改革

[登録学生数]：31

[担当教員名]：城戸・露口・高橋・池田・藤堂

令和2年度「授業評価・授業研究報告」

教育学研究科 城戸 茂

1 授業概要

(1) 目標

本授業は、入学して間もない教育実践高度化専攻の1回生を対象とした前期の専攻共通基礎科目である。本授業の目標は、大学院における自らの研究テーマを明確にさせるとともに、研究の基礎的な手法を身に着けさせることである。そこで、授業の到達目標として①今日的な教育課題について、具体例をあげて説明することができること、②教育課題の改善に資する研究テーマを設定し量的・質的側面から追求することができること、③追求成果をまとめ、説得力のある発表ができることの3点を設定している。

また、中核的なDPとして、「3. 学校教育にかかわる現代的諸課題について、幅広く専門的な知見をもとに、その対応方策を適切に考え、高度な実践力をもって学校改善・授業改善等に取り組むことができる。〔思考・判断・表現〕」及び「4. 学校に対する社会のニーズと自己の学習課題・研究課題を明確に意識し、実践を省察しつつ先導的に学習し研究する高度な教育実践力をもった専門的職業人として、自己の使命と責任とを自覚し、自主的に社会に貢献しようとする。〔関心・意欲・態度〕」を掲げて取り組んだ。

(2) 内容

本講座では、愛媛の教育現場ではどのような取組に力を入れているのか、その実態を知ってもらうことにまずは重点を置いている。愛媛に見られる教育課題は、基本的に全国どこにでも見られる教育課題でもある。こうした今日的な教育課題と、その課題の改善に向けての取組の実態を知ることを通して、大学院で追求してみたいと思う自己の研究テーマを見つけ、研究者教員の下で進める課題研究との関連も意識しながら、ミニ研究にチャレンジする。その成果は、愛媛の教育改革推進に向けての一つの提言とも捉えることができよう。本講座の主な流れを示すと、次のようになる。

(セクション① 第1回から第3回)

ここでは、研究者教員が中心となり、教育研究の基本的な進め方について講義を行う。講義の中では、ホームページに掲載している修了生の報告書の分析を行い、教育研究の進め方について具体的に学ぶとともに、本講座の最後に行う研究発表会を見据えながら、各自が本講座で行うミニ研究の構想を練る。

(セクション② 第4回から第7回)

ここでは、本学教育学部と連携協定を締結している愛媛県や市町教育委員会の管理職、教育研究団体の長を講師に招き、愛媛の教育の実態や、現在、力を入れて取り組んでいる課題改善の取組について事例を基に講話をしていただく。院生は、自己の関心事項と関連付けながら講話を聴き、質問タイムを活用して理解を深めている。

また、愛媛の取組を客観的に捉えることができるようにするため、本セクションの最後に、研究者教員が様々なデータを基に、愛媛の教育の実態について、他県と比較しながら学ぶ時間を設けている。

(セクション③ 第8回から第12回)

ここでは、教育委員会の方針に基づき、学校現場でどのような学習指導や生活指導が行われているかについて学ぶ。授業では、校長経験を有する実務家教員や現職校長から、小・中・高の学校種別に実践事例を踏まえた講話を聴き、質問タイムを活用して理解を深めることとしている。

(セクション④ 第13回から第15回)

ここでは、これまでの講義と並行して進めてきた各自のミニ研究の成果発表を、グループに分かれて受講者全員が実施する。その後、全体場で各グループの中で高い評価を得た発表内容を共有する。

以上が本講座の概要である。なお、本年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、セクション①・②は同期型リモート授業で、セクション③・④は県内の感染状況が好転したことから対面での授業を行った。

(3) 地域と連携した特色ある取組

本講座では、教育学部が連携協定を締結している教育委員会や教育研究団体と連携を図り、外部人材を活用して愛媛の最新の情報を基に学習を展開している。中でも、大学に隣接している松山市教育研修センターとの連携においては、セッション②において、センターの管理職に「市町教育委員会における教育改革」のテーマで講話をしていただいているほか、セッション②と③が終了した段階で、それぞれ1単位時間を設け、本講座で学生が設定したテーマを追求するミニ研究の方向性について検討を行っている。ここでは、数名のセンター指導主事に依頼して、個別に指導助言を受けるほか、セッション④の発表会では、発表内容に対する講評をしていただいている。院生たちは、ゼミの課題研究の時間に受けた指導と照らし合わせながら、自己の研究の方向性を明確にしていく。本授業を通して進めたミニ研究が、2年間の課題研究へとつながっていくことも少なくない。このように、本講座では、身近にある教育資源を有効に活用しながら授業の質の向上を図っている。

2 授業評価に見る成果と課題

表1は、本年度の前期授業を対象に行った教職大学院DP対応授業評価結果、表2は本講座の特色ともいえる愛媛の教育をリードしている方を外部講師として招いて行うセッション②の後に行ったりレポートの記述内容の一部である。これらを基に、本年度の授業の成果と課題について考えてみたい。

〔成果〕

・中核的なDPとして設定した〔思考・判断・表現〕と〔関心・意欲・態度〕の観点の評価

〔表1〕教職大学院DP対応授業評価結果（4件法：4かなり達成 3やや達成 2あまり 1全く）

	知識・理解	技能	思考・判断・表現	関心・意欲・態度
本授業	3.56 (+0.2)	3.11 (-0.04)	3.56 (+0.18)	3.56 (+0.05)
前期授業平均	3.36	3.15	3.38	3.51

※（ ）内の数値は対平均。

〔表2〕外部講師の授業（セッション②）後の小レポートの記述例（抜粋）

学生A	県外の大学で学んだ私にとって、本講座での外部講師のお話は、地元愛媛の教育を知る上でとても勉強になった。また、愛媛の教師として常に子供と真剣に向き合い学び続ける姿勢を忘れない教師になりたい。
学生B	様々な立場の外部講師のお話を通して、様々な観点から愛媛の教育について考えることができた。今後の研究や実習を充実したものにさせ、微力ながらも愛媛の教育に貢献できる力を身に付けていきたい。
現職学生C	データを基にした外部講師のお話を通して、愛媛の教育力の高さを改めて認識することができた。愛媛の教員としての誇りと自信をもち、真摯に子供と向き合っていきたい。

が、〔知識・技能〕と並んで最も高くなっているほか、両観点共に全体の授業の平均より高くなっている。また、セッション④の成果発表会で実施した相互評価においても、到達目標として設定した①～③の各観点の評価について全員が肯定的な評価を受けていたことから、本授業の目標は一定程度達成することができたと捉えることができる。

・〔思考・判断・表現〕の観点の評価は、全体の授業平均より0.18ポイント高くなっている。その要因として、セッション②や③で外部講師や校長経験者である実務家教員の学校現場の具体的な事例を基に学びを展開することができたこと、セッションの節目ごとにセンターの指導主事から研究に対する示唆に富む指導を受けることができたことが功を奏したものと考えられる。

・表2を見ると、外部講師の具体的な事例を基にした学びが、実践的な〔知識〕や〔関心・意欲・態度〕を高めるうえで有効であったことが伺える。

〔課題〕

・〔技能〕の観点の評価が全体の授業平均と比べても低くなっている。本講座で学ぶ技能として重視している研究手法の習得に関し、授業構成の検討が必要である。

本年度は、コロナ対応のため本講座の大きな柱の一つであるセッション②の外部人材活用の時間がリモートでの実施となり、受講後の印象も例年と比べるとやや表面的なものとなった。次年度は、多様な教育資源を活用して行っている本講座の特色が一層発揮できるよう、本年度の経験を踏まえ、授業構成等を検討していきたい。